

第8版のはじめに

第7版が出版された令和2年(2020年)の夏は、新型コロナ感染拡大の第2波のまっただ中であった。それから約2年経ち、現在(6月上旬)はオミクロン株の第6波が落ち着きつつある。ここ2年の新型コロナ感染拡大によって研究活動はいろいろと制限を受けたが、科研費申請に関しては応募から結果発表まで新型コロナに関係なく予定通りに進んだ。

この状況下で科研費関係について個人的に大きく変化した点は、従来は現地に出かけて行っていた科研費セミナーがオンライン主体になったことだろうか。当初はオンラインでのセミナーに違和感があったが、それも次第に慣れてきて、いいのか悪いのかオンラインでのセミナーも平気になってきた。正直、オンラインセミナーは好きではないが、いましばらくは仕方のないことなのだろう。

とはいえ、科研費関連でもここ2年の間にいくつかの変更はあった。その1つが、令和4年度の科研費申請書のフォーマット変更(書類の様式変更)である。そこで今回、これらの変更に対応した第8版を発行することにした。

今回の申請書の変更では、「研究目的、研究方法など」という項目と「本研究の着想に至った経緯など」という項目が1つにまとめられた。ただし、記載する内容に変更はなく、記載する順番が変更になった。そのことをふまえ、どのような順番で考えをまとめて書いていくとよいかなど、変更点と合わせて書き方のコツを解説した。また、単にフォーマット変更に対応しただけではなく、私がここ数年、さまざまな研究機関で行ったセミナーや、多くの方の申請書をチェックしてきて得られた経験を盛り込んでいる。他にも「挑戦的研究の審査方式(萌芽)」、評定要素に関する変更「パイアウト制度」「科研費審査結果のデータ」など、できる限り最新の情報に加筆・変更しているし、第7版の細部を詳細にチェックして修正を加え、より役立つように工夫して改訂した。科研費申請書だけでなく、学振特別研究員の申請書様式も変更されたため、それにも対応してある。

申請書の変更とともに、令和4年度の公募から、応募時期と審査結果の発表時期が早まった。令和4年度公募の多くの種目で審査結果が令和3年度の年度内の2月下旬に発表された。もちろん、嬉しい知らせが届くのが一番望ましいのだが、もし不採択の場合でも年度開始の日に悲しい知らせが来るよりも、年度末にその知らせが来て、新年度から新たな戦略で科研費獲得を目指す決意をする方が、個人的にはいいかなと思う。

今回の版も科研費申請に関連する変更事項を細部にわたって反映し、さらに私自身の審査委員としての経験や前版との間に得た経験を活かしている。本書がこれまで以上に研究者のお役に立てるように願っている。

令和4年6月吉日

久留米大学分子生命科学研究所にて
児島将康